

土佐清水市史編集委員・出原恵三氏

「和島誠一賞」を受賞 おめでとうございます！

本日8月9日付け「高知新聞」朝刊22面に、土佐清水市史編集委員で「考古」と「戦争遺跡」の執筆をいただいた出原恵三委員が「第24回和島誠一賞」を受賞されたことが掲載された。

この賞は、文化財保存に先駆的に取り組んだ考古学者和島誠一(1909—1971)の功績を讃え、文化財保存全国委員会(奈良市)が2000年に設立した賞であり、功績のあった個人や団体に毎年贈られている。

今回の出原氏の受賞は、南国市の田村遺跡や掩体等の発掘調査・保存活動が評価された。出原恵三氏は、高知市朝倉の旧陸軍歩兵44連隊や宿毛市鵜来島の砲



↑第132震洋隊の格納壕測量調査を実施する出原氏
台跡、本市足摺探信所の測量調査や保護活動に熱心に取り組まれている。

*** **

受賞にあたり、高知新聞の取材に応え、「先人の暮らしや戦争の記憶は、人がいなくなっても物として残っている。遺跡は未来の羅針盤。過去をよく知れば生きるヒントとなり、同じ過ちを防ぐ教訓になる。大切な物は残すべきで、その価値と活用を知ってもらい保存活動を今後もコツコツ続けていきたい」と述べられている。

万次郎人生の概観⑥

「万次郎たち3人の琉球への上陸」

(1)“あの方向に母がいます。死はもとより覚悟の上です”

ホノルルを出港したサラ・ボイド号は、風向き関係から赤道を越え、南緯10度まで南下した。正確にいうと南南西の方向に進路を取った。オーストラリア大陸の西側に位置するサモア諸島の辺りまで進み、そこから西北西に舵を切り、琉球南方海上まで再び赤道を

越えて緯度を上げた。

航海に長けている万次郎は、サラ・ボイド号のホイットモア船長の良き相談相手になったようだ。船長は万次郎に「上海まで一緒に航海してもらえないか」と懇願した。万次郎は、帰国を心待ちにしている「伝蔵や五右衛門たちを琉球に降ろしてくれれば私一人で上海まで航海を一緒にする」と船長に答えた。これを聴いて、伝蔵や五右衛門は「二人で帰国することは義にかけるので、三人上海まで行く」と言い出した。船長には、恐らく有能な万次郎が、鎖国令が徹底する日本で処刑されるかもしれないという心配があったからに違いない。

しかし、万次郎は「あの方向には母がおります。死はもとより覚悟の上です」と言い切った。固い決意の前に、船長は折れ、万次郎たちの下船を許可した。当日、北東からの風が強く、船は岸近くまで寄せることができなかった。よってそこで一泊し、次の日風が幾分おさまったので、海岸から約 10 km の場所で船を止め、万次郎たちはポート(アドベンチャー号)を降ろしてサラ・ボイド号から下船した。

(2)嘉永四年(1851)1月3日、摩文仁小渡浜海岸(現在の大度浜)に上陸

アドベンチャー号が琉球の海岸に着いたのは、翌1月3日のお昼ごろに現在の大度浜海岸のサンゴ礁の切れ目の辺りに到着した。その周辺に琉球の地元民が4~5人いた。その中で一人こちらの日本語がよく理解できる若者がおり、サンゴ礁の浅瀬からもう少し北に行っただころにちょうど良い砂浜の船着き場があるので、そこにポートを着けるように促した。この砂浜にポートを着けて、親切な地元民からガラス瓶に水をもらい、コーヒーを沸かして3人ブレイクタイムを取った。



↑ジョン万次郎上陸之地記念碑

ほどなく、地元民から知らせを受けた間切番所役人が浜に来て、3人を番所まで連行した。そこで簡単な漂着の経緯や荷物検査を受け、王府のある那覇で詳しい取り調べを受けることが決まった。もうすぐ那覇に入るといふ所(現在の那覇市小禄一帯)で、王府からの急遽知らせが入り、那覇に入ることが禁じられた。その背景には、当時英国人宣教師・ベッテルハイムが那覇に滞在しており、ベッテルハイムと万次郎らを万が一に備えて、接触させないようにする薩摩藩や王府の意向があった。事実、万次郎やホイットフィールド船長らがハワイで交友があったデーモン牧師と琉球に滞在していたベッテルハイムは親交があり、両者を接触させることは避けたいという事情があった。

(3)豊見城間切翁長村・高安家に滞在して取り調べ

那覇から締め出しをくらった万次郎は、現在の豊見城市に所在していた屋号を徳門(とくじょう)という高安家に預けられた。高安家には夜中に到着したが、そこに小禄親雲上(琉球

王府の外交長官格・那覇里主)など数人の役人が那覇から来て夜中ではあったが取り調べを行った。言葉が通じず、身振り手振りのジェスチャーを交えて何とか万次郎たちは事情を伝えることができた。

高安家では、母屋を万次郎ら3人に解放し、当主ら家族は、庭脇に仮小屋を建てて生活した。王府から万次郎らにいろいろ拝領品があったり、料理人を付けてご馳走され、泡盛も振る舞われたという。

高安家の南側には、馬場が広がっていた。琉球では古くから若者が野原や海辺で夕刻から深夜に至る



↑高安家玄関前のヒンブン

まで唄や踊りを楽しみながら交友する「毛遊び(もうあしびー)」と呼ばれる習慣があった。「毛」とは原野や広場を指す。「あしびー」とは遊びという意味である。万次郎らの拘束は緩く、彼らは馬場で開かれる綱引きに参加したり、三線で唄ったり、踊ったりして、泡盛を飲み、地元の若者と交流しつと伝えられている。万次郎は、高安家の玄関前にある魔除けの石塀「ヒンブン」を一飛びで越えて、毛遊びに行くため外出していたという。高さ1.5mをいとも簡単に飛び越える万次郎の跳躍、恐るべし！

(4)琉球から薩摩へ、薩摩から長崎へ

この高安家で、琉球王府、ついで薩摩藩と取り調べが続いた。そして、1851年7月11日、遂に翁長村を去る日が訪れた。高安家には、約半年余りの滞在であった。那覇へ行き、そこで海が凪ぐのを待ち、7月18日夜間に乗船し、薩摩国山川港へ向かい那覇に出港した。山川港には、7月30日に到着した。8月1日、万次郎ら一行は小船2艘で約50キロメートル離れた鹿児島に送られた。

このときの薩摩藩主は、当時44歳の島津斉彬で、万次郎が琉球に漂着した年(1851)の2月8日に藩主に就任したばかりであった。斉彬は国内外の事情に精通し、積極的に西洋文化を取り入れ、富国強兵をめざし、藩政改革に取り組んでいる矢先であった。そんな薩摩藩にとって万次郎が薩摩に来たことは、正に渡りに舟であった。

表面上は取り調べと称して、鹿児島に留め、外国事情を聴聞したものである。それが証拠に、斉彬は度々人払いをしたうえで、万次郎を酒宴に呼び、米国の事情を聴いたと伝えられている。万次郎らの薩摩・鹿児島における待遇は、このように優遇され、各自に単物(ひとえもの)一枚、綿入同裕羽織一枚、帷子一枚、襦袢一枚、帯一筋、下帯二筋、金子一両を賜った。また、役人より煙草、紙、手拭いなども贈られた(『西疇叢書』)。

9月18日、薩摩・鹿児島を発つ日が訪れた。陸路・河川路・海路と薩摩藩が輸送を手配し、9月29日に長崎に着いた。10月1日上陸し、直ちに揚り屋入りを命じられた。琉球や薩摩とは雲泥の差の待遇であった。揚り屋とは簡単に言えば下級武士や僧侶・医師などが入る牢屋のことである。驚いた万次郎は「何の犯罪で入牢しなければならないのか」と役人に食い下がった。年長者の伝蔵が「日本のしきたりで仕方がない」となだめたと伝えられる。入牢はしたものの、万次郎らは寛大な措置が取られ、入浴・理髪・外出も許された。また近くの寺社に参詣することも許可されている。取り調べが終わり、長崎奉行は顛末を公儀に報告している。そして、土佐藩主に万次郎ら3人の身元確認を行い、引き取りに来るよう連絡した。【続く】

〈引用・参考文献〉中濱博『中濱万次郎—「アメリカ」を初めて伝えた日本人—』富山房インターナショナル、2005年。